

# 『文肝抄』編者についての検討

室田 辰雄

## 〔抄 録〕

近年、公開された陰陽道次第書である若杉家本『文肝抄』は、四十余りの祭祀の次第・口伝を伝える貴重な資料である。成立は鎌倉後期と見られ、編者は賀茂在材周辺の人物であるとされてきた。そこで古記録から鎌倉期賀茂家の動向を確認し、『文肝抄』の編者と編纂意図について検討を試みた。結果、鎌倉期には賀茂家は四流に分派していた。その中で賀茂在親を祖とする在親流が賀茂家の中でも、上臈であったが、賀茂在清を祖とし、主流とな

る在秀流が地位を高め、在親流は傍流となった。その史的背景をもとに『文肝抄』は成立した。その編者は在親流の人物が多く本書に見えることから、在親流である賀茂在統・在彦・在材の親子が編纂したものではないかと検討した。

キーワード 賀茂家、『文肝抄』、陰陽道、在親流賀茂家

## はじめに

- はじめに
- 第一章 御曆奏を巡る賀茂家内部の対立
- 第二章 賀茂家内部の分派
- 第三章 『文肝抄』における在親流  
おわりに

若杉家本『文肝抄』（京都府立総合資料館蔵、室町写本）は村山修一氏によって近年、影印版で紹介された資料であり、中世前期の陰陽道祭祀の次第を残す貴重な資料である。現在存在が確認されている諸本は、宝永二（一七〇五）年、土御門泰福写本の宮内庁書陵部蔵土御門家文書本のみである。村山氏は土御門家本について若杉家本を藍本

として、土御門泰福が写したとしている<sup>①</sup>。

本書は四十余りの祭祀次第が陰陽師の側から確認できる貴重な資料であり、安倍家の陰陽道次第書『陰陽道祭用物帳』、安倍泰嗣編『祭文部類』と比較しても、祭祀・口伝・家伝を豊富に確認できる貴重な陰陽道祭祀の次第を伝える資料である。特徴としては祭祀を大法・中法・少法(下法)とランクをつけている。

現在、『文肝抄』の研究は村山氏の紹介の後、小坂眞二氏、山下克明氏による若干の言及があるものの<sup>②</sup>、その注目度の高さに比べて本格的な研究はなされていない。そこで、本論では若杉家本『文肝抄』の分析を試みたいと思う。

『文肝抄』の分析を行う上で考慮すべきは、編者と使用されている典籍、祭祀の内容であろう。そこで引用されている典籍を挙げる。

董仲舒、洛書斗中図、鳳國儀、雜用集、近衛長官記、光榮勘文、永久五年光平記、曾祖父御抄、事文類聚、論語、内匠ヶ記

董仲舒は高山祭や鬼気祭、火災祭、代厄祭の典拠として使用された『董仲舒祭法』もしくは『董仲舒祭書』のことであると考えられる。これらは陰陽道祭祀の基本テキストであったようで、『阿婆縛抄』「六字河臨法」にも安倍宗明の説として、祭祀のテキストである事が見える<sup>③</sup>。

『事文類聚』は南宋の祝穆と元の富大用によって編纂された類書である。一方『洛書斗中図』『鳳國儀』に関して詳細は不明である。

一方、日本の典籍は何れも佚書であると考えられる。光榮勘文は十二世紀の陰陽師賀茂光榮の勘文であろう。『近衛長官記』について、

山下氏は在宣の日記ではないかとしている。また『内匠ヶ記』については院政期、内匠頭を勤めた賀茂宗憲の日記ではないかとされる<sup>④</sup>。

このことから賀茂家に伝わる家記、家書を集積し、編纂されたテキストであると考えられる。こうしたテキストに現れる典籍の分析も今後、『文肝抄』の成立を考える上で必要であろう。

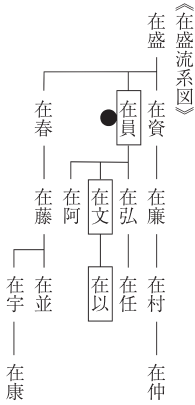
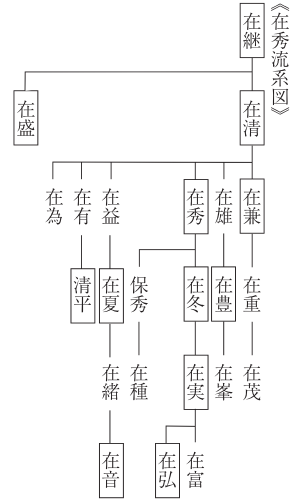
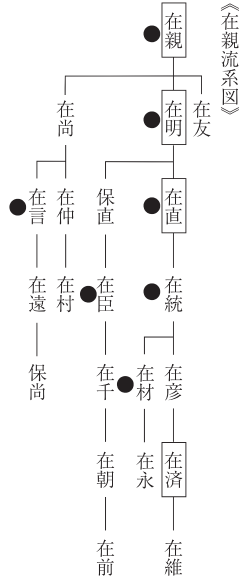
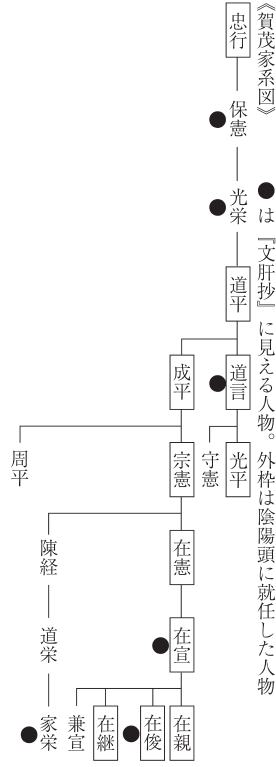
今回、本論においては編者について検討していく。本書の編纂者について村山氏は、賀茂家の人物の名が多数確認でき、「曾祖父御抄」<sup>在明</sup>「在材私云」とあることから、在明の曾孫に当たる賀茂在材かその兄にあたる在彦、もしくはその周辺にいる人物が編纂したと推定している<sup>⑤</sup>。賀茂在材は『医陰系図』によれば、在統の子であり、造曆の宣旨を受け、主計頭、漏刻博士、権暦博士を歴任している。また、弘安九年(一二八六)に陰陽権少允であり、『昭訓門院御産愚記』乾元二年(一二三〇三)には散位であったことが確認できる<sup>⑥</sup>。成立年代については文中にみえる最も下る年代である建治四年(一二七八)からさほど遡らない鎌倉後期ではないかと推定している。

以上に挙げた村山氏の説を踏まえて、人物、年代を文中と古記録から再検討し、本書の編纂者について述べたいと思う。

まず本書に記述されている賀茂家の人物を挙げると、賀茂保憲、光榮、道言、光平、家榮、在憲、在宣、在親、在俊、在継、在明、在清、在直、在言、在員、在臣、在材。この他に官職名で記されている人物では、五帝祭の記事に仁治元年(一二四〇)八月に陰陽助として記述される。仁治元年時に陰陽助であった人物は在友であるため、在友と考えられる。

このように陰陽家としての賀茂家を確立した保憲から、鎌倉後期の在材までの人物が見える。在憲以降は鎌倉期の陰陽師である。在継、在清は室町期の勘解由小路家となる系譜である。しかし、嫡流に当る在清の子息であり、陰陽頭在秀らの名前は確認できない。在員は在盛の子息である。

一方、在親、在明、在友、在直、在言、在臣、在材といった人物は、どのような系譜にあたるのだろうか。遠藤珠紀氏によれば鎌倉中期以降賀茂家は大きく四つの流派（在親流、在秀流、在盛流、周平流）に別れていたとする。在親以下は、その内の在親流であったことが系図から確認できる。



そこで『文肝抄』に見える「亡父在直」「曾祖父「在明」御抄」との記述を系図から確認すると、在直の子息は在統であり、在明の曾孫に当たる人物は在彦、在材である。よって在統、在彦、在材一家によって編纂されたのではないだろうか。そこからは暦道賀茂家全体の家説等を蒐集して編纂されたと見るより、限定的な在親流の家書・家説を集積した文献として見るほうが妥当であると思われる。そこで本論では『文肝抄』の編者について、村山氏、遠藤氏の研究に導かれつつ、鎌倉期の賀茂家の動向を検討し、成立した背景を見ていこうと思う。

## 第一章 御曆奏を巡る賀茂家内部の対立

『文肝抄』が成立した鎌倉後期の賀茂家の状況について述べる。その前に、先行研究から、鎌倉期の陰陽道について概観する。

現在、鎌倉期の陰陽道については、木村進氏を始めとして、鎌倉武家政権下における陰陽道の様相が明らかにされつつある。木村氏は『吾妻鏡』の記述から、鎌倉武家政権が四段階に分けて陰陽道を受容したことを述べた。本格的に陰陽道が受容された時期は、四代將軍九条頼経が鎌倉に下ったことが契機となった。九条頼経に伴い東下した陰陽師の大半は安倍親職を始めとする安倍家であった。赤澤春彦氏は、小侍所に陰陽師が所属し、鎌倉幕府より録を賜い、鎌倉幕府政権下に取り込まれたことを明らかにした。このように、鎌倉幕府政権下においては、安倍家による陰陽道が主流であり、幕府に所属し、將軍家や得宗家に奉仕していた。<sup>⑧</sup>一方、賀茂家は、鎌倉で活動した人物は安倍家と比較して少なく、主に京において活動していたと看做した。ところが、『医陰系図』を見ると、兼宣が東下したことが脚注に見える。また子息の在持が三島に住したことも注記されており、賀茂家の一部も関東へ下向したことが窺える。

では、鎌倉期の京における陰陽道はいかなる様相を呈していたのだろうか。陰陽道史を概観した村山氏は陰陽頭に安倍家が賀茂家より任じられる回数が増加したことを指摘している。また「鎌倉の陰陽師団が安倍氏に独占された点からみても、賀茂氏の頽勢は最早明らか」とし、経済的な面から見ても鎌倉幕府と関係の深い安倍家が、賀茂家を

圧倒していたとしている。<sup>⑨</sup>

賀茂家内部の状況について、高田義人氏は鎌倉中期成立、賀茂家の曆注書『陰陽吉凶抄』に勘解由小路、大炊御門の説があり、それぞれが賀茂氏の一流であると推定し、鎌倉中期には賀茂家に、勘解由小路家・大炊御門家といった流派があったのではないかとしている。<sup>⑩</sup>従来勘解由小路家は室町期に賀茂在貞が改称した家名とされていたが、鎌倉期には既に家号があったことが伺える。

鎌倉期の賀茂家の状況については、遠藤氏は鎌倉期に、曆跋に記載される賀茂家の人数が増加していることに着目し、賀茂家が四流に分かれ、それぞれの流派が競合関係にあったことを指摘した。その中でも鎌倉後期には在清、在秀を祖とし、室町期の勘解由小路家となる在秀流が曆博士、陰陽頭を独占し、他流の賀茂氏が陰陽寮内部での立場が弱体化していく過程を明らかにした。また、武家政権と関わりを持つことにより、家を盛り立てた周平流にも着目された。流派が分かれた要因として、曆道の独占により、氏族内での競合を引き起したことが原因としている。その際、「中世的家」としての特徴を兼ね備えていたことも指摘している。また、六波羅探題と関係を持ち、京都に住しつつ幕府に仕える陰陽師の存在がいたとしている。<sup>⑪</sup>

鎌倉期の陰陽師の状況について、山下氏は『文肝抄』に「管領之仁」との表記があり、鎌倉後期には天皇・院及び権門の子女を日常的に護持を行っていた可能性があることを述べている。<sup>⑫</sup>

これらのことから、鎌倉期の賀茂家は、安倍家に対して劣勢に回り、鎌倉武家社会とは周平流、兼宣親子を除きあまり関わりを持たず、京

を中心に活動しており、四流に別れ各流ごとに勘解由小路・大炊御門と家号を持ち、各流派が「家」として独立した立場にあった可能性が伺える。

こうした暦道賀茂家が分派したことを明確に表す一つの事象として、遠藤氏は仁治元年（一二四〇）十一月一日冬至の御曆奏に伴う暦道相論を上げている。<sup>13</sup> 御曆奏とは、冬至朔旦が十一月一日となる日に、天皇に次年度の暦を進上し、貴族に頒暦を行う儀式である。陰陽頭、助、允、属の四等官と暦博士が参加していた。安倍家が陰陽頭の場合は慣例として、陰陽頭は参加せず、正に暦道賀茂家のアイデンティティを示す重要な儀礼であった。山下氏によれば、十二世紀には頒暦が料紙不足により行われず、<sup>14</sup> 暦道賀茂家の存在を示す儀礼としての意味を強めた。

この御曆奏に関して問題が発生したのが、仁治元年閏十月であった。詳細は平経高の日記『平戸記』に記されているので見ていくと、閏十月十四日に雅楽頭賀茂在清が平経高に対して訴えた。その内容は、御曆奏を行う権利を有する陰陽頭、助、允、属ら四等官が重服・軽服であり、暦博士が関東に行き不在であることにより参加できない旨を伝えた。そこで安倍家が介入を試みていると訴えたのである。当時陰陽頭は安倍忠尚、陰陽助賀茂在友、暦博士賀茂在尚は重服であり、権暦博士定昌は関東に居た為、参加が困難であったのである。そこで、在清らは定昌が関東に下向し、幕府に奉仕したことを罪として解任させ、子息定名に権暦博士を継がせる案。権暦博士を増員して在職を任じる案。軽服の者に対しては参仕を憚らない案を出した。そこで急遽定昌

が帰洛し、御曆奏に参加し、その他の軽服者については憚らず、安倍家の介入を阻止したのである。結果御曆奏には権暦博士定昌、陰陽博士在盛、権陰陽博士在兼、陰陽少允在職、権陰陽少允在直によって行われた。在盛、在兼は軽服であったものの参加し、在直は前日に造曆宣旨を受け参加することが可能となった。

一連の記事に見える人物は賀茂在清、在直、在高、在盛、在友、定昌、定名、在職、在盛である。特に在清、在盛らが中心となつて訴訟を起こしていた。当時在清は雅楽頭であり、陰陽寮内の官職にはついておらず、在清自身もまた、御曆奏に参加できる立場ではなかった。

そのような状況下でも在清が中心的な人物であったことは、記事に経高の元へ訴え続けたことから明らかであろう。この行動に対し不信感を在友は感じていたようである。平経高は、閏十月二十七日条にて次のように記述している。

陰陽助在友朝臣「重服者也」以陰陽少允在道「猶子」為使、示送曆道訴訟間事、令申之趣、條々相分、頗相違在清在盛朝臣等申状在友は在親の子息で、立場的には賀茂家の上首であり、重服の為に御曆奏に参加できない立場であった。申状を提出したものの中に在直もいるため、一概に在親流と在清流、在盛流との対立からとはいえないものの、既に賀茂家内部でも意見の相違があったことを示す。この一件に対して、経高は「是故在親法師與舍弟在繼朝臣不快之間、其孫等如此欺」との見解を示しており、在親とその弟であり在清の父に当たる在繼の頃からの対立があったことを示している。氏族内の分派は在親、在繼の世代からあったことが推測され、家の分



派の萌芽が見える。

一連の記事から、賀茂家の上首である在友が中心に御曆奏に対応しておらず、在清、在盛、在直らが行動していたことがわかる。

では、在親流はどのような状況にあったのだろうか。在親流の祖在親は『平戸記』仁治元年閏十月の暦道相論の際、在清によって、「祖父在宣法師存生之時、以在親朝臣為上首、満道種々令申置候了」としている。在親が在宣の跡を継ぎ、賀茂家の最上臈であつたことを示す記事である。仁治元年時には、陰陽助であり、在親の子息在友が賀茂家の最上臈であつた。しかしながら、先に述べたように、在友は重服であつたため、暦道相論には表立つて参加できず、御曆奏に参加することになつた。御曆奏を巡る相論から、在清が発言権を強め、賀茂家内部において優位に立つたと見ることも可能であろう。そのために在友の立場が弱くなつた為か、在友は嫡流でありながら主流にならず、弟の在明が賀茂家の上首となつた。

『医陰系図』を見ると在親流が優位であつたのは、陰陽頭について在済までであり、その後は在秀流が主流となる。在親流で造暦宣旨を受けた者を系図から確認すると、在済、在材、在朝までであり、在親流から以後造暦宣旨を受けたものは見えず、在秀流に独占されていく。このように在親流から在秀流へと賀茂家における立場が変化していくことがわかる。

そこで記録上の陰陽頭の順を確認すると、在親の後、陰陽頭に着任したのは在俊、在明、在清であつた。次にその弟在盛の順であるが、在彦の子息在済の後は、在親流から陰陽頭を輩出することはなく、在

秀流が主流となつていたのである。

在秀流の祖、在秀について確認すると『勘仲記』に陰陽道の上臈として記述されている人物として記述されている。在秀は在清の子息にあたり、賀茂家の長であつたと考えられる。

在秀流が主流となることについて、御曆奏で在清が有利な立場にいたことが一要因であるとされるが、決定的な事象ではないだろう。では、どのような行為を以つて在清が賀茂家の長と成り得たのだろうか。記録から在清の活動を確認していく。

## 第二章 賀茂家内部の分派

一章では、仁治元年の御曆奏において在清が中心的な役割を果たしたことを論じた。本章では、在清一家がいかにして賀茂家の主流となつたか論じていこうと思う。

宝治元年(一二四七)五月十三日に月蝕について相論が発生した。『葉黄記』によれば、賀茂家、算道、宿曜師に相論をさせたところ、賀茂在尚、在直が十六日に蝕が起ると主張したことに對し、在清、在盛は十五日に蝕が起ると主張した。そこで、記主である葉室定嗣が召したところ、在清は十六日寅刻に起るとし、「以術道之意申之」と主張した。對して在尚は十七日寅刻に起るとし、「且就先例申之」と主張した。在尚が先例に基づいた予測を行い、在清は「術道之意」を以つて予測したことは、在清が先例に拠らず、在尚と異なる典籍を用いた。或いは暦算を行った可能性を示す。結果としては在清が正し

く、その賞として同月十七日の小除目において正四位上に昇叙されている。

在清・在盛は在繼を父とする兄弟であり、在尚・在直は在親流である。この両者には明らかな対立関係が看取できる。

では、在清は賀茂家内部で有位となった立場をどのようにして磐石のものとしたのだろうか。『民経記』正元元年（一二五九）閏十月十五日の記事に、正五位下に昇位した賀茂在言の注に「宝治元年五龍御祭在清朝臣賞讓」とある。在言は在尚の子息であり、在親流の傍流にあたる。在言は在明との対立意識のためか、在清と交流関係を結んでいたと考えられる。

他流の子弟以外にも、実子である在雄に雷公風伯祭の賞を讓る記事が同年十一月二十一日条に確認できる。

こうした官位上昇を訴求する行動を具体的に、申文という形で見ることができ。そこで『勘仲記』裏文書「賀茂在言申文」を確認する<sup>16</sup>。

□五龍御祭賞、以男賀茂□（在力）遠、可被叙從四位下事、

0□□（以父力）之勤賞、達子之要望者、□明時之恒典也、爰在

言去□月依炎早、奉仕五龍御祭、□（両力）澤忽降、効驗炳焉也、

就之、□（雖力）預叡感之 綸旨、未達□賞之微望、登用之处、

誰謂□□（非據力）、然者、早任先例、以件在遠、□□（被叙）

從四位下者、將知先例有限、□（仰力）勸賞異他矣、

賀茂在言が広橋兼仲に対し、自身の五龍祭の成功に対する賞として、子息在遠の昇官を希望している。在言は在親の孫に当たると。同様の例として勘仲記裏文書「賀茂某申文」には雷公風伯祭の賞として、子息

在幸の昇官を求めている<sup>17</sup>。在幸の名は系図には見えず、いかなる人物か不明である。

このような申文を持つて官位上昇を求める行為は以前からあったように、<sup>18</sup>「安倍範昌申文」には、後嵯峨天皇（在位仁治三年（一二四二）～寛元四年（一二四六））在世時に、賀茂在重が祖父在満（在清の事か）の北極玄宮祭の賞を元に昇官した事例を上げ、子息の昇官を求めている<sup>18</sup>。

ここで注目される点としては、申文に挙げられている祭祀は五龍祭、風伯祭雷公祭といった公的祭祀であることと、祭祀の執行者自身の昇官を求めているのではなく、その子息の昇官を求めている点にあらう。宮廷陰陽道において、親の功績を子孫に相続させる行為は十二世紀末には確認できる<sup>19</sup>。そこには各流の存続を希望し、互いに祭祀や暦道の功績を巡って競合する陰陽師達の姿が伺える。

暦道に纏わる意見の相違の他に、祭祀の論功を巡って、在親流と在清流は対立していたと考えられる。そうした意見の相違は『文肝抄』荒神祓にも確認できる。在親流の在明が荒神祓の神前を五座、精進を供物としたのに対し、在清は神前を七座、供物を魚味としており、他流との区別化を図ろうとしていたことがわかる。在清は他にも通常甲子の革命の際に行う海若祭を、甲子の年ではなく、辛酉の年である弘長元年（一二六一）二月八日に難波浦で行っていた<sup>20</sup>。このように祭祀で自らの特異性を示し、それが各流派の祭祀の形成に繋がると考えられる。

また祭祀の論功を子孫に譲る行為は、相続権の委譲を意味している

のではないだろうか。ここで中世貴族社会における「家」の継承を巡る状況を確認すると、宮廷儀礼を司る摂関家や、中世局務家などの実務官僚の家では文書や日記といった家職に関わる「知」の継承が「家」の存続に欠かせないとされる。<sup>21)</sup> また高橋秀樹氏によれば、中世的な「家」は家格の成立にともなう政治的地位の父子継承と政務の儀式化傾向を背景に形成された家文書・家記・物具の継承の中で成立したとしている。<sup>22)</sup> 陰陽家においても同様の現象はあったと考えられる。

陰陽道において、家職に関わるテキストは、日記や勘文集、暦注書や天文書、陰陽書、祭祀次第書があるだろう。そうしたテキストと共に祭祀次第の相承もあったと考えられる。

賀茂家の分派が進むなかで、暦の知識のみではなく、祭祀を持って自己の流派の正統性を図ろうとしたといえよう。山下氏は中世陰陽家の相続について、公家の祈禱権と一体化した家産の相続が最も重要視されたことを指摘している。<sup>23)</sup> こうしたことからも陰陽道において祭祀は相続の対象として重要視されたとみなすこともできよう。他流との差別化を図り、自らの流派の存在意義を高めた。こうした祭祀を巡る活動の中で創出されたテキストとして『文肝抄』を位置付けることも可能ではないだろうか。

### 第三章 『文肝抄』における在親流

『文肝抄』に表れる在親流の人物がどのように現れるか。本書の記述を通して分析し、編者について考察する。

① 輕服陰陽師祓事―四条院降誕之時、在親之管領輕服事出来之間、御祓者以代官令勤仕、

② 五帝并四海祭―此御祭者邂逅事也、在支云、仁治元年八月廿八日御勤仕之曩祖保之在憲等御勤仕云、季尚々去年勤仕之曩祖晴明之勤仕以件例可行之由令上

奏云、而傍輩ル極虚誕<sup>(虫損)</sup>□□仕之時晴明具官云々、又令度御虫<sup>鏡敷(虫損)</sup>□□一面被早且中央棚有<sup>(虫損)</sup>□星反閑宗春誦咒「中音也」、又被進歴名云々、亡父「在直」令勤仕具官<sup>(給カ)(虫損)(向カ)</sup>□□□□記不見頗不審也、家繁記也<sup>(門徒也)</sup>

「仁治元―八月日 陰陽助、四海神御祭用物注付之合點之外件神祭不入之合點写之」

③ 三万六千神祭―祝賀茂朝臣散位在宣、献者主税助賀茂朝臣在親、謁者漏刻博士賀茂朝臣在俊、奉礼陰陽權大允賀茂朝臣在繼

④ 防解火災祭―「在材私云或説二艘置寢殿丙壬両方件船上土瓶各一口具之草ヲ殖テ梁上(ウツハリノ)之云々」

⑤ 西獄真人鎮―在直被仰之、或圖云瓶一口二神像ヲ造入テ、瓶二向南天立之、神像ハ五位衣冠也、梁上置之供神ハ洗米一杯酒一杯上之、

⑥ 河臨祭―幣幡座用意之、銭形不用之、在員在臣共上已祓銭形用意之、不可説也、新儀歟

⑦ 土曜祭―南方向之可祭之歟「在材注之神人」

⑧ 荒神祓―以棹十二破陣、以注連三重引之、神座五前每座懸絵像、備供物精進也、是在明長官殿被用此様ノ、當長官殿者用八座様魚味也<sup>在清朝臣</sup>

① 在親が四条天皇誕生の際に、輕服であつた為、祓は代官が行つてい



たことが記されている。『民経記』寛喜三年（一二三一）一月十三日条に、主税頭在親が四条天皇の母中宮藤原樽子の出産予定日を勘進した記事が見える。『文肝抄』の記述が示す通り軽服であったためか以降、樽子御座に直接、関わる記事には出てこない。在親は先述したように、賀茂家の長であった人物である。『平戸記』仁治元年（一二四〇）には没していたようで、「故在親法師」と記述されている。<sup>24</sup>

②在支の説として、安倍晴明が五帝祭を行ったとしているが、晴明は具官として参加しているに過ぎず、虚誕であるとしている。ここからは安倍家に対する対抗意識が窺え、保憲、在憲が行ったと主張することにより、賀茂家が中心に行った祭祀であることを強調している。勿論、晴明が中心となって五帝祭を行ったことは歴史的事実ではなく、『文肝抄』で主張されるように賀茂保憲が中心となっていた。<sup>25</sup>

一方で安倍家は、晴明自身が己の功績として主張し、安倍家の書である『陰陽道旧記抄』『反問作法并事例』などに晴明が中心となっていたことを述べている。<sup>26</sup>こうした晴明以来安倍家が作り上げた伝承に対して、賀茂家が保憲・在憲といった先人を立てて、対抗しようとしていたことが伺えるのである。

「亡父在直」という注記は、『文肝抄』の編者を推定する上で、重要な注記である。在直の子息は在統であり、在材らの父である。よって注記を入れたと考えられる在統は『文肝抄』の編者候補として有力な人物であるといえよう。

③建永二年（一二〇七）二月二十二日に在宣が中心となり、三万六千神祭を行っていたことがわかる。在親、在俊、在継は皆、在宣の子息

であり、一家で祭祀を執行していたことがわかる。散位でありながら、祭祀の中心的な執行者である祝官にあることは、十三世紀初頭の賀茂家は在宣を頂点として機能していたことを示しているといえよう。

④「在材私云」として或説を引用している。在材は、⑦土曜祭の注記にも見え、『文肝抄』編纂に関わることを示す根拠とされていた。

⑤在直は在親から見て孫に当たり、在材の祖父に当る。造曆宣旨を受け、図書頭、大舍人頭、権曆博士を歴任している。

そこで問題となるのは、亡父在直と注した人物である。村山氏は在直の子息在統が書き入れたと推定している。<sup>27</sup>在統自身が書き入れた注ならば、『文肝抄』の編纂者は在統と考えられる。在統は在材の父でもあり、在統が編纂した『文肝抄』を後に在材が注を付けたとも想定できる。

⑥在員は在盛の子息に当る。造曆宣旨を受け、大膳権大夫、曆博士、陰陽博士、陰陽頭を歴任し、正四位下となっている。陰陽頭となっていることから、在盛流の上首であったことが推測できる。一方在臣は在明を祖父に持つ在親流に属する人物である。造曆の宣旨を受け、従四位上陰陽権助となっている。『文肝抄』では在員、在臣が上巳祓において、銭形を用いることに疑問を感じ、「新儀歟」としている。在親流の在臣が在盛流の在員と同じ説を用い、本書の編纂者と意見が異なる要因としては、在親流内部でも意見の相違があったことを示す。

⑧在明は在親の子息、在友の弟であり、在統一家の祖に当たる。造曆宣旨を受け、内匠頭、曆博士、陰陽助、陰陽頭、正四位上と歴任している。『葉黄記』寛元四年（一二四六）一月二十二日の記事に元は在

公であつたが、在明に改名したことが見える。対する「当長官」こと  
在清はこうした在明の行つた荒神祓に対して新儀を行つていた。荒神  
祓自体は元来密教から取り入れられたものと考えられるため、こうし  
た次第の相異が表れ、在清は供物を精進から魚味へと変更することに  
より、荒神を仏教系神格から陰陽道的神格へと変化させようとしたと  
考えられる。<sup>(28)</sup>そこからは在清の祭祀に対するこだわりが伺え、他流と  
の区別化を図る意味もあつたと考えられるのである。

ここに挙げた人物達は在員・在清を除き、在親流の人物であり、在  
明、在直、在統は陰陽頭に昇り、在親流の上首であると共に、賀茂家  
の上臈であつたことがわかる。つまり、編者は在親流の家説を受容す  
ることが可能な立場の人物であつたと推定できる。

ここで不自然な点として、在統の嫡男であり、在材の兄に当る在彦  
の名が『文肝抄』にまったく見当らないことである。在彦は系図や記  
録によれば造暦の宣旨を受け、兵庫頭、大膳権大夫、暦博士、陰陽助  
を歴任し、正四位下であつた。鎌倉末の在親流のトップであつたこと  
は間違いないであろう。そこで在彦の名が見当らない事は不自然であ  
る。

また土曜祭の注である「在材注之」との注は在材が書き入れたので  
はなく、第三者が書き入れたのではないかとの推測が可能ではないだ  
ろうか。そこで近親者として候補になる人物は在彦、もしくは在材の  
子息在永といった想定も可能である。

つまり在統が編纂したものを基に、在彦と在材、在永といった「在  
統一家」によって代々編纂されたとみるべきではないだろうか。その

背景には、前述した在清、在秀流に対する対抗意識から編纂されたと  
みることもできるだろう。

### おわりに

『文肝抄』の編者は従来、在材周辺の人物と推測されてきた。そこ  
で本論では、鎌倉期の賀茂家の状況を踏まえ、編者について検討を行  
つた。結果、鎌倉期の賀茂家は、四流に分派した当初は在親流が主流  
であつた。しかしながら、在清の功績、それに伴う賞の相続により鎌  
倉後期には在秀流が主流となつていった。一方、在親流は在材以降、  
陰陽寮内で高位につくことはなく、衰退の一途を辿つたと考えられる。<sup>(29)</sup>

こうした状況を踏まえて編者について検討すると、在統、在彦、在  
材といった一家によって、自己の流派の祭祀に関する知識を、子孫に  
残す為に編纂したものと考えられる。そこには在秀流や周平流に押さ  
れ、衰退していく在親流の存在意義を高めるテキストとしての意味も  
あつたと考えられよう。

### 〔資料文献〕

- 若杉家本『文肝抄』（村山修一編『陰陽道基礎史料集成』東京美術 一九  
八七）  
増補史料大成『平戸記』  
増補史料大成『勘仲記』  
大日本古記録『民経記』  
史料纂集『葉黄記』  
壬生本『医陰系図』（高田義人・詫間直樹編『陰陽道関係史料』汲古書院

二〇〇一)

〔注〕

- (1) 村山修一編『陰陽道基礎史料集成』東京美術 一九八七
- (2) 小坂眞二「祭・祓と陰陽道の祭祀部門」(村山修一編『陰陽道叢書特論』名著出版 一九九三)。山下克明「陰陽道関連史料の伝存状況」(『東洋研究』第一六〇・二〇〇六)によって紹介されている。
- (3) 大正蔵 図像部第九収録
- (4) 山下前掲(2)
- (5) 村山前掲書(1)
- (6) 『鎌倉遺文』第二十八 No.二一四八三
- (7) 遠藤珠紀「鎌倉期における曆家賀茂氏の変遷」(『鎌倉遺文研究』第十五 二〇〇五)
- (8) 鎌倉武家政権と陰陽道については、木村進「鎌倉時代の陰陽道の一考察」(『陰陽道叢書 中世』名著出版 一九九三)、金沢正大「関東天文・陰陽道成立に関する一考察」(『陰陽道叢書 中世』名著出版 一九九三)、新川哲雄「鎌倉と京の陰陽道」(『日本思想史懇話会編』季刊 日本思想史 第五十八号 二〇〇一)。佐々木馨「鎌倉幕府と陰陽道」(佐伯有清編『日本古代中世の政治と宗教』吉川弘文館 二〇〇二)、赤澤春彦「陰陽師と鎌倉幕府」(『日本史研究』四九六号 二〇〇三)、「鎌倉期における陰陽家安倍氏について」(『中央史学』三十一 二〇〇八)
- (9) 村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房 一九八一
- (10) 高田義人「陰陽吉凶抄」解題」(高田義人・詫間直樹『陰陽道関係史料』汲古書院 二〇〇一)
- (11) 遠藤前掲(7)
- (12) 山下克明氏(『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院 一九九六)によれば、「管領之仁」は藏人所陰陽師の機能を受け継ぎ、管領陰陽師と見なしている。
- (13) 遠藤前掲(7)

(14) 山下前掲書(12)。

- (15) 桃裕行氏(『暦法の研究』下 思文閣出版 一九九〇)によれば、月蝕勘文において賀茂家が宣明暦の他に、符天暦によって暦算をした可能性を指摘している。一方、細井浩志氏「古代・中世における暦道の技術水準について」(『史淵』一三二 一九九五)において、反論もある。
  - (16) 『兼仲卿記』正応五年九月卷裏文書(『鎌倉遺文』第二十三 No.一七九〇七)
  - (17) 『兼仲卿記』弘安七年三月卷裏文書(『鎌倉遺文』第二十 No.一五〇九九)
- (折紙)
- 言上
- 朝臣去文永十年八月勤仕雷公□□御祭賞、以男從五位下賀茂在幸、□叙從五位上事
- 勵勸学以来、多年既傳術道之□□少允之後、幾日久致禁闕之拝口、□□在有望申一級云云、若達昇進之□□(所望者カ)懷超越之
- 愁者也、仍募雷公風伯□□学申之、件年勤仕御祭之後、□□(風雨得カ)時都鄙静謐、以彼賞令浴□□(恩賞者カ)承前之恒規、每度の佳例也、凡□□下臈一級之時、雖無所募、被□□被付昇者先例也、況以嚴重之□□之、爭無哀憐哉、抑見歷名之面、□□輩少雖有上臈之号、在廉之□□断一級之思者也、仍各不申子細、□□(敢無異カ)論歟、幸逢無偏之德化、何不□□之微望哉、然則任申請叙一級者、□□勸賞之異他、彌抽御祈之忠節矣、□□(仍賞カ)上如件
- (18) 「安倍範昌申状」『兼仲卿記』弘安十年八月卷裏文書(『鎌倉遺文』第二十一 No.一五八〇五)
- (範カ)昌上啓
- 孫安倍範経被超越位次下臈賀茂在千・安倍忠秀、任□先例、可賜同日位記事、
- 位次下臈昇進之時、被付昇上臈、又任申請被 宣下□位記者、古今之佳

例也、爰範経依為彼等之上薦、日来□事申入者也、而不被付之條、愁訴無比類、以勸賞浴□、猶被付昇可然之上薦、且□嵯峨院御時、賀茂在重募祖父在滿朝臣玄宮北極御祭賞、□□晴弘募晴繼朝臣同御賞、共叙五位從上之時、愚息良□為彼等之上薦、被付昇畢、例不可求外歟、此外就上薦訴□、或被止下薦昇進之位記、或賜同日位記事、每度之□□也、範昌已及衰老之齡、旁積奉公之勞、範経為嫡孫、□可不被優異哉、且可為攘災歟、早賜同日之位記、彌知□(明力)時之德化、以此趣可然之様、可令洩達給矣、範昌誠恐□首謹言、

(弘安九年カ)

二月五日

雅楽頭安倍範昌狀

- (19) 国書刊行會『明月記』建久九年(一一九八)九月六日条
- (20) 国史大系『百鍊抄』
- (21) 松園齊『日記の家』吉川弘文館 一九九七。家職に伴う官司請負制については佐藤進一『日本の中世国家』岩波書店 一九八三。
- (22) 高橋秀樹『日本中世の家と親族』吉川弘文館 一九九六
- (23) 山下前掲書(12)
- (24) 『平戸記』仁治元年閏十月二十七日条
- (25) 五帝祭については、山下前掲書(12)を参照。
- (26) 斎藤英喜『安倍晴明』ミネルヴァ書房 二〇〇四を参照。
- (27) 村山前掲書(1)
- (28) 『文肝抄』の荒神祓については拙稿『『文肝抄』所収荒神祓についての一考察』、『佛教大学大学院紀要』第三十五 二〇〇七)を参照。
- (29) 鎌倉期の貴族の分家について、市沢哲氏(『鎌倉後期公家社会の構造と「治天の君」』、『日本史研究』314号 一九八八)は「鎌倉後期は院政期以来の貴族の分家の最後のピークであり、かつ分家が抑止され始めた時期」としている。

〈付記〉

校了後、赤澤春彦氏「鎌倉期の官人陰陽師」(『鎌倉遺文研究』三十一 二〇〇八)の存在を知り、十分にその成果を活かすことができなかった。

(むろた たつお

文学研究科仏教文化専攻博士後期課程)

(指導・斎藤 英喜 教授)

二〇〇八年九月三十日受理